

プーチンの選択したもの

——ユーコスつぶしとオリガルヒ資本主義の行方——

[I]

鈴木 博 信

はじめに

1章 プーチンのユーコスつぶし

2章 オリガルヒ資本主義の行方

3章 プーチンの選択したもの

4章 「ノメンクラトゥーラ」は不滅である——「党の所有する国家」はたしかに「諸政党を所有する国家」へと反転した、ただし……

5章 ロシア政治史のサイクルからみると

キーワード：プーチン，オリガルヒ資本主義，ノメンクラトゥーラ，イミテーション民主主義，ロシア政治史

はじめに

高騰する原油価格のおかげで一挙に財政赤字が消え、ソ連崩壊後の急激な落ち込みから一転して五年つづきの高成長に転じ、政局も安定していたプーチンのロシア……。

ところが、2003年7月、オリガルヒ切⁽¹⁾っての富豪ミハイル・ハダルコフスキーの経営するロシア随一の優良企業といわれたユーコス石油がだしぬけに強制捜査をうけた。10年前に不当な落札行為によって国有企業を超安値で入手したとして、ユーコスの子会社の社長とハダルコフスキー社長の側近中の側近であるプラトン・レーベジェフが逮捕された。かれらにたいする告発には、まもなく殺人・殺人未遂・詐欺・巨額の脱税等々が付けくわえられた。

この事件がおきた直後、わたしは、プーチン政権のユーコス弾圧はハダルコフスキーが金力を駆って政界に進出するのを牽制することがなにより狙いとおもわれるので、ロシア切⁽¹⁾っての優良企業であるユーコス社つぶしそのものは強行せずに踏みとどまるやもしれぬ、と推測して、大要つぎのように記した。

——ロシアの政治家が競争的選挙で選ばれるようになったことはロシア史上の画期的な変化にはちがいないが、立法府など三権の上にクレムリンが一種の絶対的権力として君臨するという構造そのものはかわっていない。ソ連崩壊後のロシアに生まれたほんとうにあたらしい要素は、オリガルヒが出現し、その金力を背景にしてクレムリンに挑戦する真の野党勢力をつくり出す潜在力をもつに至ったことであろう。

果たせるかな、ユーコスのハダルコフスキー社長は右派・リベラル派の右派同盟とヤブロコの2野党と左派の反対勢力である共産党にたいして巨額の選挙資金を提供しはじめた。

これをみたクレムリンの支柱たる「シラヴィキー」派の反応は明快だ

った。

「シラヴィキー」というのは、ソ連時代の治安機関や軍関係者、とりわけ「KGB=国家保安委員会」（ロシア連邦になってからは「FSB=連邦保安局」とよび名がかわった）出身者の謂いである。（ロシア語の「シーラ」=パワー；力、権力から来たことばで、「シーラをもつ連中」、つまり「腕力派」, 「強権的統制派」とでもいえばよい。）プーチン政権の中枢である「大統領府」を構成する主勢力は、経済運営を主体とするリベラル派のエコノミストや法律家からなる政策マンの集団とならんで、これらのいわゆる、シラヴィキーが圧倒的な比重を占めている。シラヴィキーの、多くは生まれも育ちもプーチンと同郷のピーチェル出身者が目立つわけだが（「ピーチェル」は地元市民がサンクト・ペテルブルクを指すときの愛称）、腕力派がクレムリンを占領したかにみえるのは、いうまでもなくクレムリンの主人であるプーチンがKGB育ちの同郷者たちを信頼できる忠臣団・家臣群として大量にクレムリンに引き連れてきたからに他ならない。みずからがKGBの諜報将校出身のプーチンのことである。ジャーマン・シェパードが、おなじで毛並みと育ちのジャーマン・シェパードと群れを作ろうとするのに、不思議はない。

プーチンに忠誠なシラヴィキーらはすばやくうごいた。クレムリンの主人公である「大統領」の権力、すなわち、クレムリンの一元的・集権的権力支配に挑戦するおそれのあるもう一つの権力中心がロシアに誕生し、ロシアの政治社会が2つの権力中心をもつ楕円構造になることだけは許さない、という決然たる意思をしめしたのである。それが、7月にレーベジェフら2人をおそった逮捕劇だった。その意味では、いかに有力なオリガルヒといえどもクレムリンが許容する範囲でのみ生存できるのであり、オリガルヒの権勢といってもいまなお神話にすぎないのである。⁽²⁾

とはいえ、プーチンがハダルコフスキーの政治的野心にはしたたかに痛棒をふるう一方で、ロシア切つての優良企業として税金の上でも企業統治の面でも国際水準を抜く水際だったパフォーマンスを示しはじめ

ていたユーコス石油そのものをもただちにつぶしてしまうには至らないのではないのか。いまは、世界にむけて有力なロシア企業は開いてみせねばならないとき、世界経済のなかにロシア経済を食いこませて資本と技術を集散的に吸収してゆかざるをえない段階にあるロシア経済にとって、ユーコス社についてはいまひととき利用・活用したあとで処置をきめればすむことだ。そうプーチンが認識していること明らかなようである。

ユーコスしめつけ劇の直後に、かねてからユーコスが申請していた、「シブネフチ石油と合併して世界的な石油メジャーを発足させたい」という計画にロシア政府独占禁止委員会がゴー・サインを出したことは、その例証といえるのではないだろうか——⁽³⁾

2003年9月11日現在で筆者が立てていた、あらまし以上のような予測は、まもなく消しとんだ。

同年10月末、ハダルコフスキー社長がユーコス石油傘下のかせぎ頭であるシベリアの「ユガンスクネフチェガス」社視察の途次、自家用ジェット機でノヴォシビルスク空港に降り立ち燃料を補給しはじめたところを、プレスを引きつれて待ちぶせしていたFSBの武装部隊がこれみよがしに逮捕してしまったのである。モスクワに連行されたハダルコフスキーは劣悪な環境で悪名高いマトロスカヤ・チシナー拘置所の八人部屋の雑居房に押し込まれ、ここで判決までの日々をすごすことになった。

40才にして80億ドルちかい個人資産をもち、クウェート一国以上の日産量の石油を産出するロシア最大の石油企業のオーナーへと一気に駆け上がったポスト・ソビエト資本主義の代表選手の運命は、劇的に転換した。

ハダルコフスキーは巨額の脱税と詐欺のかどで起訴された。これを追うようにして、当局はユーコスの口座をすべて封鎖した上で、ユガンスクネフチェガス社にたいし、脱税金額と追徴金を即刻納付せよ、その資金を調達するためにも同社の一切を入札にかけるべし、という強硬な行政命令が出され、入札が強行された。

落札した無名の投資会社は、国営石油企業のロスネフチ社のダミーだった。その結果、ユガンスクネフチェガス社はロスネフチ社に強引に吸収・合併されたのも同然となり、ユーコス社の解体が急速に進行することになった。ただし、落札には額の多少にかかわらず資金が必要である。それがどこから調達されたのか、は後述する。

これと平行してこの年12月に行われた下院選挙では、プーチン政権の翼賛政党である「統一ロシア」が圧勝してこれに追従する政派とともに議席の3分の2以上を掌握してしまう。あけて2004年3月に再選を果たしたプーチン大統領は、ロシア全土89の自治体の知事・首長を住民の選挙制から大統領による任命制に切りかえるという大転換をやったのけるなど、全面的な中央集権化、「大統領」強権支配化にむけて全力を傾注しつつある。

1期目には、クレムリンに前任者のエリツィン大統領から引きついでエリツィン「一家」(ロシアのマスコミは「セミヤー」=「ファミリー」とロシアのマスコミはよびならわしてきた)の実力者を居座らせて妥協しつつ満を持してきたプーチン⁽⁴⁾政権は、2期目に入るや、セミヤーの実力者であるヴォロージン大統領府長官、カシヤノフ首相らを退任させ、クレムリンを完全に直参の腹心で固めおえた。

これからみるように、プーチンがハダルコスキー社長もろともユーコスつぶしにふみ切り、それをふまえて強力な再選大統領として登場したことにより、プーチンが「ロシア経済の市場化とロシア政治の民主化」という2つのテーマをどのように組合わせて展開することに決めたのか、その構図が最終的に浮彫りになったといえる。

結論を先取りしていえば、改革に手を付けたとたん一方的にくず折れるように崩壊してしまい、だしぬけに「冷戦」の敗者になってしまったソ連＝ロシアの自尊心をよみがえらせ、「強国」として国際舞台にふたたび復活させるために、クレムリンの強力な管理下での市場化と世界市場への統合・食いこみは推進する。そのためにも、欧米先進国の共有する制度であり価値観のシステムである「民主主義」「民主化」にはつきあっていかざるをえないし、つきあって行く。

しかし、ロシアの政治社会を安定させ秩序づけて強国として再建するにはクレムリンによる一元的・強権的支配の確立を最優先せざるをえないので、民主化の方はいわば制度面・演出面でのみ打ち上げるパフォーマンスの民主化として披露しておくに止めるしかない。別のいい方をすれば、「民主化」はいわば「イミテーション民主主義」として骨抜きにした形で展開していくことにする——。これが、いまや明確になったプーチン・ロシアの戦略構想といえよう。

この構図をつぶさに例証をあげて具体化し肉付けする作業はつぎに予定している論考にゆずることにして、本稿ではきわめて不十分ながらこの構図のいわば箇条書きの素描をこころみることにしたい。

1章 プーチンのユーコスつぶし

1989年初夏の北京。ゴルバチョフのソ連につづけ、と政治の民主化をもとめて天安門広場に集まっていた学生たちに共産党の「元老」鄧小平の命令一下、人民解放軍の戦車がおそいかかった。民主化運動は数千人は下らないといわれる（が、今も正確な数字は公表されていない）死者を出してけちらされ、中国のゴルバチョフ役を演じようとしていた趙紫陽も失脚して、中国の「ベレストロイカ時代」は挫折におわった。

中国共産党は、国民に鉄腕をふるうことも辞さない「権力機構の垂直化⁽⁵⁾」を打ちたて、その管理下で「国家資本主義」を展開する時代に入った。ここで採用された、経済は市場化するが、その分、政治権力は垂直化・強権化するという、この政治と経済の組み合わせのテクノロジーは、日々有効さを立証しつつある。

欧米日のビジネスマンと資本が「もうけ」の香りを嗅ぎつけて中国に流れ込んでくれる。そこでは、お金は匂わない。戦車がふみつぶした若者たちの血の匂いはしない。いかに非倫理的な方策をつかった、いかに無慚な貪婪さが産みだした金であっても、政治の場をとおすと匂いは消えるのだ。あるいは匂いが消えたものと了解しあって権力者たちが権力と貪欲を満た

しあう活動分野が政治の場である、といいかえてもよいだろう。

天安門事件から20年経って中国はアジアの虎になった。自由経済は自由のない国家においてすら大した成果をあげうることを明らかにした。

かつてはアメリカと張り合う世界第2の超大国だった国も、中国の後を追う追従国のひとつとなった。いまやロシアはすすんで中国に武器を売り込み外貨を稼いでいる。ちなみにアメリカの政治は「天安門の虐殺」にたいするこだわりから武器売り込みは自制しつづけており、ヨーロッパの元首たちもしぶしぶながらアメリカに義理をたてているが、フランスやドイツの大企業首脳たちが「そんな些細な名分に囚われていては政治家の本分に悖るのではないかと」、自国の政治家に不満を鳴らしていることはよく知られている。

お金は匂わない。権力がそう決め、権力者同士がそう了解しあうかぎりにおいて。⁽⁷⁾ところが、ハダルコフスキーの金とそれがロシアの内外で果たしている役割については、別扱いとなったのだ。

プーチン政権は、ハダルコフスキーとユーコスのかせぐ金は悪臭をはなっている、と認識することに決めた。よってハダルコフスキー社長も盟友のレーベジェフのあとを追って逮捕されたわけである。

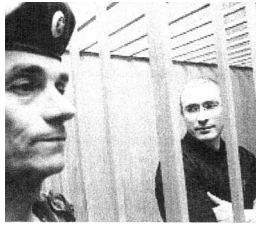
そして、2004年9月に懲役8年の実刑判決をうけて、きびしい報道管制のもとでメディアのまえから姿を消した。翌10月になって、かれはモスクワから6000キロ以上はなれた東シベリア・チタ州のモンゴルや中国の国境にちかいウスチカメノゴルスクの監獄で服役中であることが判明した。冬期には-30℃まで下がる寒冷の地で、5時起床22時就床の日常だ。1日8時間は警官の制服などを縫う作業をさせられ、23ルーブルほどの日当をうけている。日本円で93円というところである。

それでも、おなじ裁判でおなじく懲役8年ときまった盟友のメナテップ社のレーベジェフ会長が⁽⁸⁾おくりこまれた北極圏に近いニューネツ自治管区の重罪犯刑務所よりはマシといえなくもない。レーベジェフの服役する刑務所は白夜の夏につづいてやってくる冬期は-60℃まで下がる酷寒の地なのである。それにしても、ふたりが保釈も一切拒否されたまま、帝政ロシ

図 1



脱税・横領など7項目の罪状で逮捕される直前のユーコス社ハダルコフスキー社長（'03年9月）



公判廷では檻の中が被告席



懲役9年の実刑でシベリアに流刑と決定後（'05年5月）の記者会見も格子越し

ア時代の重大な国事犯さながらにシベリアの果てや極北の地への流刑に処せられたのを見て、ロシアに自国の企業や資本を進出させている西側諸国の政府は一時不安をおさえかねた。プーチン政府はいまになって私有化政策を見直して再国有化もふくむ資産の再分配にとりかかるつもりなのだろうか？ と。

人権擁護の活動家やリベラルなエコノミストたちも嫌悪と反発を隠さなかった。

——エネルギー資源をあつかう有力企業とはいえ国営特有の非効率経営にあえていた赤字企業をわがものとするや、欧米型の競争原理を導入して幹部社員には信賞必罰をもつてのぞみ経営内容・株式構成等については西側の指導的企業も顔負けしかねないほどオープンにして外国人株主も外国人社外重役も招き入れ、逮捕される前にはユーコスを世界に誇れる透明性のお手本、あるべき「企業統治」のモデルとすらいえる優良企業に変身させていた、ロシア切っての知性派、独立精神に富んだ企業家ハダルコフスキー、このような貴重な人材の企業家生命、ひいては政治生命をしゃにむにつぶしにかかるとは、ハダルコフスキーの金力、それをふまえた政治的影響力を過剰におそれるプーチン一派の不法逮捕、司法の名を借りた政治弾圧にほかならない、とはげしい抗議の声をあげたのだ。

プーチン政権のユーコスつぶしはハダルコフスキー逮捕でおわることなく、その後もユーコス本体とすべての関連会社にたいして執拗につづけら

れた。中堅幹部もあいついで引きたてられてそれぞれに有罪判決をうけ、一連のユーコス関係のオフィスはパニック状態におちいったのである。その執拗さ、すさまじさの一端は、アメリカの石油会社の経営首脳からユーコスにリクルートされ2001年4月以来ユーコス社の財務担当重役をつとめているブルース・ミザモアやワシントン在住の国際商事法務専門の弁護士で、ユーコスの社外重役も引きうけてきたサラ・ケアリー女史ら、いずれもアメリカ市民の関係者が語ってくれたことからもうかがえる。⁽¹¹⁾以下は、ミザモア氏の証言のごく一部である。

自分は、2003年11月、同僚とつれだつてロンドンでの会議をすませ、飛行場まできたところへモスクワの情報筋から緊急連絡がはいり、そのまま帰国するとモスクワで一網打尽に逮捕されると知らされて帰国をおもいとどまらざるをえなかった。以後南部のヒューストンを中心にアメリカに滞在しつづけていて、モスクワにはもどれないままである。自分らのオフィスは、ロンドンに行くまえから何度も手入れをうけふみあらされ荒涼としたものになっている。

いまからおもうと、プーチン政権は2003年に入るか入らぬかの時期から、ユーコスつぶしを計画していたとおもえる。この年のうちにハダルコフスキーら関係者を逮捕してしまい、そして2004年丸一年をかけて、ユーコスを解体して国のものに、すなわちプーチンのものに、より正確にいうとプーチンの息のかかった人間のものにしてしまおう、と計画していたことがわかる。すべては徹底して「政治的決断」である。プーチンのロシアには民主主義的アクセサリーは揃えてあるものの、ミスター・クレムリンのプーチンのごく少数の側近とともに重要な意思決定はすべてとり仕切っている点において、「スターリンのごく少数の側近」だけでソ連を支配していたソビエト帝国の運営方式と本質はかわっていない。

10年前にさかのぼってしらべたところ、ユーコスは巨額の脱税をつみかさねてきたことが判明した、という当局の主張には根拠がない。

ユーコス社の税務会計はプライスウォーターハウスクーパーなど西側で高い信頼をえてきた、複数の代表的な会計事務所の手でつぶさに監査をうけてきており、それに不正があるといういいがかりは、“イツツ・シンプリー・ギャング・ワーク！”（まさにゆすり・たかりのやることだ。）わたしたちは2004年だけでも、ロシア政府にたいし70通にのぼる質問書を提出してユーコスのどこに、どん不正行為があったというのか、事実でしめしてほしいと要請しているが、ナシのつぶてである…。

ユーコス事件にあっては、米国民であるミザモア氏すら逮捕・投獄の対象になっていたわけであり、ロシア人幹部で投獄をまぬがれたものといえば、はやめに国外に逃れていたものにかぎられる。

現在追求を逃れてイスラエルに住むレオニート・ネヴズリン・ユーコス副社長によると、1999年当時、連邦保安局長官だったときにすでにプーチンの胸中にはハダルコフスキー憎しのおもいが兆していたらしい。

プーチン長官はネヴズリンにたいし、「ほかのオリガルヒ連中は週に一度は顔をみせにくるのに、（会いにこない）きみやハダルコフスキーの行動は奇妙だ」⁽¹²⁾とのべ、オリガルヒのなかでは、ハダルコフスキーらだけが物静かだが権力に迎合しない姿勢を堅持していることに露骨に不快の念をしめして暗に警告していたというのである。そうしたプーチンの心性や執念深さにハダルコフスキーがどんな戦略と信条で対応してきたか、は次章でふれることにする。

2章 オリガルヒ資本主義の行方

それがわれわれの定めなのか、
ヨーロッパの最新の夢を生き抜くことが。
ヨーロッパがその夢のもたらす危険な道に
踏みこまないで すむように、⁽¹³⁾と。

エリツイン・ロシアの生みおとしたオリガルヒが「政商」として権勢をふるった「資本主義」をどう規定し、どんな形容を与えるか、は巨富の所有者になったのがだれか、かれらがその富をどんな方法で入手したか、という、巨富の獲得者なり獲得の仕方なりといった目のつけどころに応じて「オリガルヒ資本主義」(マーシャル・ゴールドマン)、「泥棒資本主義」(ジョージ・ソロス)等々のヴァラエティにとんだ規定を生んだきたが、「だれが」「どのように」立ちまわってオリガルヒになったにせよ、オリガルヒを筆頭とするもろもろの資本家の誕生をお膳立てし、育て、あるいは許容してきたのはだれなのか、かれらの生みの親、「製作者」はだれなのかという面からみると、それはソ連社会の支配層、統治エリートであったノーメンクラトゥーラ層以外にありえない。

ことわるまでもないが、ノーメンクラトゥーラというのは共産党がソヴィエト帝国をただ一党で支配するための具体的な仕組みとして作りあげた人事制度であり、ようするに党が押さえておきたい帝国のすみずみにいたる職務を一覧表にとりまとめ、そのポストにだれをつけるかの任命権・承認権は、党が一方的にぎっておく、そのポストにすわらせる候補者のリストも党で一方的に用意しておく、という仕掛けになっていた。つまり、一党支配制なるものの制度上の核心がノーメンクラトゥーラであった。そこから転じて、ノーメンクラトゥーラに上がっているポストに、とりわけ上層のポストにすわるソ連社会の支配層を指すことばになった。いまでは「ソ連型社会の支配階級」「赤い貴族たち」といった意味で使われることが多いのは、そんなわけである。(さらにはロシア人の「茶の間」の用語となり、妻の尻にしかれている夫が「うちのノーメンクラトゥーラ母ちゃんが…」といった使われ方をするまでに至っている。

いってみればノーメンクラトゥーラとは、そうしたシステムへの忠誠心と忠誠度をふまえた人脈とで構成される「権力保持のための同業者組合」とでもいえる。「権力保持同業者組合」とその組合員、の双方をノーメンクラトゥーラとよぶ、そう了解してもらえばよい。

国有企業の経営幹部やかれらの管理・指示にあたってきた中央・地方の

省庁の大物官僚たち、あるいはかれらの二世の青年官僚ないしはかれらに見込まれて資金の運営をまかされたハダルコフスキーのようなコムソモールの「坊やたち」等々は、この同業組合のインサイダー、準インサイダーたる人脈をつかって国有だったものを私有にうつすことで企業や資金を入手した。こうしてオリガルヒになったものは、いわばノーメンクラトゥーラ型オリガルヒといえよう。

これにたいして、次章でもふれるような、ノーメンクラトゥーラ層の枠外にしながらノーメンクラトゥーラ層との人脈を開拓してついにエリツイン大統領を「^{クルイシヤ}屋根」、つまり庇護者にするところまで^{へあが}経上ったベレゾフスキーやグシンスキーといった人物は「才覚派オリガルヒ」とでも命名すべきタイプであるが、前者のノーメンクラトゥーラ型オリガルヒにせよ成り上がり型、才覚型オリガルヒにしる、ノーメンクラトゥーラ層なりノーメンクラトゥーラ層のなかの権力者集団なりの同意・許容・支持があってはじめて「棲息」を許される点ではかわりないのである。

これはすでにエリツイン時代から否定しようもない明白な事実であった。

そういう消息からして、オリガルヒたちは基本的にはソビエト・ロシアからエリツイン・ロシアにもちこされたノーメンクラトゥーラ人脈やそれを核にしながらか新規に形成された権力者集団によって、アーヴェン・アルファ銀行頭取がいみじくもいいあてているとお⁽¹⁴⁾り、オリガルヒに「任命」されたきた、といえるわけである。一時は権勢をきわめエリツイン大統領の金庫番とすらいわれた「しりすぎた男」ベレゾフスキーや強力なメディア王国をきづいて権力にも是々非々の立場を崩そうとしなかった「けむたい男」グシンスキー——、大統領就任直後のプーチンがこれら2人の「しりすぎた男」と「けむたい男」を狙い打ちにして亡命生活に追いやったところまでは、ロシア社会もそれほど大きな衝撃をうけはしなかったものの、ロシア第一の優良企業となり、「資本主義ロシア」が世界に誇る企業モデルへと成長して、不動の地位を築いていたようにみえたユーコスつぶしをだしぬけに断行したこと、これはオリガルヒ資本主義の歴史をぬりかえる大事件となったのである。

すなわち、プーチンは、大統領権力がオリガルヒや有力資本家を事実上「任命」するだけでなく、クレムリンの胸三寸にしたがっていかにくれた企業家といえどもほしいままに「解任」出来ること、クレムリンの権力はかくのごとく卓越したものであって、ロシア資本主義は「トップのビジネス・エリートすらクレムリンが任命もすれば解任もできるものとして運営されること」を天下に宣明してのけたわけである。べつのいい方をしてみよう。最優良企業ユーコスをつぶすことにより、クレムリンがオリガルヒを自由に任免できることをみせつけて、「オリガルヒ資本主義」を「クレムリン資本主義」とでもいえるものに転換させたのだ。

2005年末～2006年初頭にかけてプーチン政権が矢つぎばやにくりだしている一連の政策にふれながら、ユーコスつぶしによってオリガルヒ資本主義がどのように変質させられたか、それがロシア社会のありかたをどう変えつつあるか、に立ち入ってみよう。

(桃大での大先達として、かつ初代の法学部長として、かわることなくご愛導してくださった林錫璋教授への感謝をこめて——。以下次号。2006年2月12日)

〔注〕

- (1) 権力とむすびつくことによって石油・鉱物資源などの‘おいしい’国有企業を有利きわまる条件で入手して一挙に億万長者になった、エリツイン・ロシアの申し子ともいえる「オリガルフ」(寡頭支配者・寡占資本家を意味するロシア語)の複数が「オリガルヒ」。組織としての寡頭支配制はオリガルヒヤ、その複数がオリガルヒー。以上のいずれもが、日本では「新興財閥」と訳されることが多い。

かれらはソ連崩壊にともなう体制転換に乗じてそれぞれにいち早く銀行をつくり、エリツイン・ファミリーの庇護のもとに銀行をテコにして優良国有企業に分捕り合戦に成功し、権勢をふるうが、エリツインのあとをおそったプーチンは、オリガルヒの政治的影響力を削ぎおとすことからスタートした。

プーチンは、つぎのようにオリガルヒを定義することによってエリツイン系のオリガリヒを押しえ込みつぶし、プーチン直系のオリガリヒを育ていく。「かげにかくれて政治上の決定に影響力をふるおうとする大

企業の首脳を、わが国では、オリガルヒとよぶ。このような人物集団の存在をゆるしてはならない（『独立新聞』[ロシア語]、2002年12月26日）。

- (2) 個人資産70～80億ドルとも推定されるロシアの億万長者が、優良なエネルギー産業を強奪しただけで満足せずに、さらに政界にまでり出そうというのでは、厚かましさにほどもがある。ハダルコフスキーらはまだ奪い足りないというのか？

すくなくともこれが大統領府副長官をつとめていたプーチン直参の武闘派、イーゴリ・セーチン——その献身ぶりで「忠臣イーゴリ」とよばれ大統領後継者候補のひとりにも取りざたされている——の反応だった。

盗聴されロシアのマスコミに洩れた携帯電話記録のなかで、セーチンはしゃべっている。

「2、3日あのひどいブトゥイルカ監獄にユーコスの中を泊めてやるがいい。森を支配しているのがだれか、わかるだろう」。つまり、ロシアをだれが仕切っているか、目にものをみせてやれというのである、マーシャル・ゴールドマン著、鈴木博信訳『強奪されたロシア経済』（日本放送協会、2003年）、15ページ参照。

- (3) 前掲書、訳者あとがき、425～27ページ。
 (4) この「歴史的妥協」の時期のクレムリン内部の相貌・人事配置については、拙稿「ロシア2002年秋——プーチン時代一面」、『桃山法学』創刊号、2003年3月、336～41ページを参照。
 (5) 共産党という上着を脱ぎ捨ててしまったという点で共産中国とちがいはあるものの、プーチンのロシアが採用・活用しているのも、おなじテクノロジーにはかならない。

あとにもふれるとおり、権力の「垂直化」（ロシア語でいう「ヴェルティカリ」）こそプーチンの愛用するテクノロジーであり、かれのスピーチにしきりに登場するキーワードのひとつでもある。2004年3月に再選を果たしたプーチンが選挙戦中に行った演説といえ、同年2月にモスクワ大学に中央・地方の「忠臣たち」や支持者を集めて行った出馬演説だけであるが、この演説の山場にもこのキーワードがちりばめられていた。

いわく、——わたしにはこの出馬声明がいいに選挙運動や選挙演説をする必要がない。日々の活動をとおして刻々に国民の信を問うているからだ。わたしが第1期目にあげたなよりの実績はロシアに「秩序」と「安定」を回復させたことである。1999年以降、国内総生産は29.9%上昇した。失業者は3分の1に減り、最低賃金は過去3年間で4倍になっ

た。「不確実で不安にみちた時代はすぎ、生活水準を向上させる条件がととのった、あたらしい時代の到来が実感できる」。そうした新時代を招きよせるために、わたしは憲法秩序を回復させ、「権力機構の垂直化を実現した」と(『論拠と事実』[ロシア語], 2004年2月, 6号)。

- (6) アメリカのこの姿勢を分析するには、たとえば、軽部恵子「冷戦後の米中関係と中国の人権問題——米国連邦議会の視点から——」, 『桃山法学』第6号, 2005年8月, がよい手引きになる。
- (7) この真理を、ややちがった表現ながらぬきんでた明晰さで指摘してくれている同胞が存在する。米原万理さん——ユニークな作家として活躍しているもとロシア語同時通訳の第1人者——のつぎの一文はわすれることなく引用しておきたい。

「国家的事業でありさえすれば、どんな恐ろしい兵器の開発も、製造も、使用さえも、犯罪の範疇には入らない。これを取り締まり、押収する警察も、裁く法廷もない。国連の決議だの、多国籍軍だのは、はっきり言って茶番だ。

湾岸戦争当時イラク側が使用した兵器の90%以上が米中ソ英仏という国連安保理常任理事国からの輸出品だったのだから、『国際貢献』というお題目にひっかかって先進国中最大の極限のお布施をさせられた日本はいい面の皮だ。

イラク空爆を刊行したとたん、当時低迷していたブッシュ大統領の人氣は90%台まで沸騰し、核実験再開を公約に掲げたシラクは、仏大統領当選を果たした。

国家による殺戮と残虐行為が裁かれるのは、その国家が戦争に敗北した場合だけである。ドイツと日本の戦争犯罪は裁かれたが、自国民を大量に弾圧殺戮したスターリンも、日本への原爆投下を決定したトルーマンも天寿を全うしたではないか。

オウムが国家を標榜していたとは、実にブラックなパロディーだ」(米原万理『ロシアは今日も荒れ模様——Россия Бушует и Сегодня——』, 草思社, 1999年, 150ページ)

- (8) プラトン・レーベジェフ(1959～)は、プレハーノフ記念国民経済大学を卒業して、ソ連鉱物貿易公団「ザルベジゲオロギア」に採用され若手官僚として10年近くつとめたあと、ゴルバチョフ時代の1990年、ハダルコフスキーらのつくった銀行兼持株会社のメナテップ銀行にうつり、ユーコス石油を筆頭とするグループ各社の金融面の面倒をみてきた。

ハダルコフスキー(1963～)はモスクワの理系名門大学であるメンデ

レーエフ記念科学技術大学の卒業生であるが、在学中、上記のプレハーノフ記念国民経済大学にも2年間通って金融・財政専攻のコースをとり、法律も学んだ。レーベージェフとはそのとき以来の盟友である。

ハダルコフスキーは大学外では、母校のメンデレーエフ大学をふくむ地区の青年共産同盟の副書記として精力的に活動し、コムソモールの上部組織である共産党やゆたかな財源をもつ一部の国家科学委員会などの有力者に可愛がられ、人脈を拡げていった。命令経済から市場経済への大転換期だからといっておいそれと若冠20才や30才で億万長者になれるはずもない「青年オリガルヒ」のおおくは、じつはこうした「コムソモール出身の坊やたち」であり、かれらの資金はもとをたどるとソ連共産党やソ連政府の金庫に行きつく。

社会主義ソ連の党・国家の要職を占めていた「ノーメンクラトゥーラ上層部」は、じぶんたちソ連の支配層が建国いらい70年にわたってバッシングしつづけてきた当の資本主義体制へと大転換するにあたって、若く野心的で適応力のある「コムソモールの坊やたち」にポスト・ソビエト資本主義の「道路づくり」を先導させることにし、党や国家の資金を託したのだ。

ハダルコフスキーは、そうした坊やの中でも出色の人物であり、KGBのなかでも西側世界での諜報活動を担当するとびきりのエリート分子をふくむ党中央や省庁の複数のパトロンから、「いいか、きみらがわれわれの実験にこたえてまず資本家になりかわるのだ」と“洗礼”をうけて大金をまかされたのである。

ソ連が崩壊した1991年、ハダルコフスキー自身がそのいきさつを明言しているとおりである。「あの時期にスタートした事業はすべて、高位高官の座にある人びとがスポンサーになっているか、その人たちとコネクションがあるかした場合にのみ、成功できた」。「カギはおカネではなくてパトロンがいるかないかだった」（『マイアミ・ヘラルド』紙記者、ピーター・スレーヴィンの問いにこたえて。『マイアミ・ヘラルド』、1991年8月18日号）。

ハダルコフスキーらの訪問に応じて「坊やたち」に最初に大金を提供した国立「高温度研究所」の所長でソ連科学アカデミーの正会員でもあった、超高温物理学のソ連最高の権威者、アレクサンドル・シェインドリン教授の回想も付記しておこう。

教授の主宰する「高温度研究所」は冷戦たけなわの60年代に創設され、超高温物理、それを応用し、アメリカと張り合っけてロケット推進機構、

レーザー兵器開発の最先端の理論と実験を展開する重要施設として最盛期には4000人のスタッフをかかえ、潤沢な予算を与えられてきた。ソ連は冷戦の敗者となり、研究所のレーザー兵器開発作業も巨大なむだ使いにおわたったものの、ハダルコフスキーらへの資金や海外人脈の情報提供をつうじて、「ロシア社会に資本主義を生みつける孵インキュベーター化器」(デイヴィッド・ホフマン)の役割を果たしたことになる。

教授は学生企業家の卵、ハダルコフスキーらと会ったときのことをこう語っている。「かれらはじつに若かった。わたしはかれらが大好きになった」。「かれらはコムソモールの活動家としてよく知られていた。洗練された清純な若者たちであり、けちな泥棒とはちがう」。「かれらは言った。すこし資金がほしいのです。興味のある事業をみつけて、誠意をもって活動します」。わたしは、のちに自動車王の一人となったアメリカの実業家デイヴィッド・バッカードがガレージからスタートしたのを思い出した。事業をはじめするには開業資金がいるとおもった。そういうわけで、「いまではたしかなことは覚えていないが、1万7千ルーブリを提供したとおもう」。

条件として、科学研究につかうこと、とっておいた。「むろん、かれらが科学につかうはずがないことはわかっていた。かれらがわたしの研究所のためになにかしてくれるはずのないことも、よくわかっていたさ」(デイヴィッド・ホフマン『オリガルヒたち——あたらしいロシアにおける富と権力』[英語]、107～108ページ、ニューヨーク、2002年)

ハダルコフスキー自身のこのときの回想は教授のそれとはすこしズレがあるが、いずれにせよ、共産党への人材供給プールであるコムソモールが、ソ連共産党が反転して資本主義へと飛びうつるさいの人材を供給する「ビジネス・スクール」の役割を果たしたことは特記に値する。

この点で、さきにもふれたとおり、ハダルコフスキーらコムソモール出身の若い資本家たちはいわばソ連のノーメンクラトゥーラ層がリクルートし「任命」して育てた「正統派」オリガルヒともいえる。

これにたいし、ソ連体制のアウトサイダーとして生活してきて「中年になってから」、ノーメンクラトゥーラ上層部に人脈を開拓してオリガルヒに経上がった数理科学者出身のベレゾフスキーや舞台監督出のグシンスキーら、腕一本で財をなした才覚派のオリガルヒとは、形成過程がまるでちがう。

- (9) ふたりが居住地ないし公判の行われた法廷のちかくで刑に服するという市民に認められた権利をうばわれて遠隔地へ流刑されたのは、明白な

違法行為であるが、その点にかんする当局側の、たとえばヤマロ＝ニューネツ重罪犯刑務所のユーリー・カーニン所長の申しひらきはつぎのとおり。

「メナテップ社レーベジェフ元会長の健康診断の結果は、ここで刑期をつとめることと矛盾はしない。刑期を勤めあげるだけの体力は十分にある。

しかし、受刑地選定にあたって考慮されたのは、なににもまして二人の安全である。遠隔地であるから、かれらもわれわれもだれの妨害もうけないですむ道理だ。

かれらの事件はロシア社会に強烈な反応をよんだ。一方にはかれらを支持してデモまでする人々や集団、法律家たちがいる。もっともかれらはお金も受け取っている。

他方には、ソ連時代に国民がつくりあげた資産を国民から強奪したのがかれらである、抜け目なく立ちまわって億万長者になった人間をそのままにしておくものか、国民として、うけた侮辱ははらさずしておくものか、と考えるものがある。

これでは、かれらの身にながおきてもおかしくない。われわれは、かれらの安全を確保してやるのに十分な手を打たなかった。とあとになって責められたくはないのだ」（モスクワ発、インターファックス、2006年1月2日）

- (10) ついでながら「企業統治」の実績となると、日本企業は全体としてミスター・ハダルコフスキーにはるかに及ばない。昨年、米英の調査会社があいついで発表した「企業統治」の番付けによると、日本とギリシャは、株主軽視という点で世界首位の座を競いあっている。

まず昨年3月発表の米GMI（ガヴァナンス・メトリックス・インターナショナル）の番付けによると、主要数十カ国の中で最下位はギリシャ、日本は下から2番目。

8月発表の英EIRS（エシカル・インヴェストメント・リサーチ・サーヴィシズ）の番付けでは、ギリシャと順位が逆転して日本は最下位になっている。

低評価の主因は、経営にも申せる独立性のある社外取締役の導入がおこなわれていることだ。

日本は国際的な「企業統治」＝「ガヴァナンス」の最後尾を走っているだけに、企業を「統治する側」である公的年金基金など各国の機関投資家を主要メンバーとする IOGN（国際コーポレート・ガヴァナンス・ネ

ットワーク)の年次大会でもいつも影がうすく、日本の公的年金団体からの参加者は昨年は2年つづきでゼロという実状だ。

それにくらべると、1998年の金融危機をさかいにして経営をおもい切ってオープンにし、「欧米諸国から何人も社外重役をうけ入れるとともに、株主構成もホームページで全面的に公開しているユーコス社の透明性はあっぱれなもの」(サラ・ケアリー女史)といえる。

- (11) 28回アーデンハウス会議(ニューヨーク州ハリマン村), 2005年4月10日, にて。
- (12) 『読売新聞』, モスクワ特電, 2005年6月1日号。
- (13) マクシミリヤン・ヴァローシン『^{スピーチ}詩, ^{スタチー}論策, 追想』[ロシア語](モスクワ, 1991), 137ページ]
- (14) たとえば、ロシア最大の民間銀行であるアルファ銀行の頭取をつとめるピョートル・アーヴェン氏は、僚友のミハイル・フリードマンとともにロシア第4の石油会社やスーパーマーケット・チェーン、保険会社等々から成る「アルファ・グループ」をひきいるオリガルヒであるが、著名な数学者の令息として生まれたノーメンクラトウーラ・ジュニアの人脉をテコにしてエリツイン政権に外国貿易相としてすべりこみ、このポストをとおして培ったコネで新興財閥にのしあがった。

アーヴェン頭取は、自分が権力とむすびついて利権を獲得し一気に富裕化したことを、筆者が2002年秋に会ったさいにも率直に告白してくれたが(アーヴェン氏セミナー, モスクワ, 2002年9月10日), あるロシア人ジャーナリストにたいし、つぎの引用文にみるとおり、自分がオリガルヒに「任命」されたというさらに端的に表現をつかって、オリガルヒ形成プロセスの実相をいいあてている。

「わが国で百万長者になるには、頭のよさやとくべつの知識は全然必要ではない。政府・議会・地方自治体・法執行機関のなかに強力な支持者があれば、ていていは十分である。

ある晴れた日、(……)きみのつくった吹けばとぶような銀行が、国家予算から出た公的資金でオペレーションをしてよい、と許可される。あるいは、石油・木材・天然ガスを輸出できる(……)たっぷりした割り当てを獲得する。

きみは、いってみれば「百万長者に任命されるのだ」(イーゴリ・バラノフスキー「テロはロシア的競争の現実」, 『モスコウ・ニュース』[英語], 1994年7月22~28日号, 傍点による強調は鈴木)